

前期レフ・トルストイの生活と創作
——「内なる女性像」から生じた問題とその解決を中心に——
(概要)

佐藤雄亮

はじめに

本稿は、この作家の「内なる女性像」——彼が心に抱いていた理想の女性像で、女とはこういうもの、こうあるべきものという根源的なイメージ——が、彼の人生と創作にどんな問題を突きつけ、それを彼がどう解決したか、という観点を軸に、それと関連する視点を有機的に組み合わせて、前期トルストイの全体像を読み解こうとしたものだ。

その結果、彼の伝記的事実、思想の根源的動機から個々の作品の構造、小説作法にいたるまで少なからぬ発見をなしえたと思ふ。また、その「副産物」として、1812年のナポレオンのロシア遠征、いわゆる「祖国戦争」におけるロシア側の真相もかなり解明されたと思う。

これらの知見は、一トルストイにとどまらぬ意義と広がりをも有し、ロシアの思想、文学、歴史の研究にも寄与し得るのではあるまいか。と同時に、その生涯の全体が、これまで指摘されなかった強烈な独創性に輝いており、今日に生きる我々に向けて無言のメッセージを発していると確信する。

先行研究

こうしたコンセプトでの先行研究は、藤沼貴氏の「カチューシャの系譜」がほぼ唯一の先駆的業績だが¹、氏は、扱う対象を下層出身の女性に限っており、ナターシャ・ロストワ、アンナ・カレーニナなどの貴族女性が「系譜」から外れてしまった。だが筆者の見解では、「内なる女性像」は、彼女らにおいてもそれぞれに特定の課題のもとに具象化されており、一貫した展開を示す。それを見ていくことでこそ、作家の前期と後期の断層も浮かび上がるのだ。

第1部 カフカス

トルストイには、世界というものは、幸福な家庭を基礎として調和すべきものだということ、抜きがたい思いが、ごく若い頃からあった。その幸福な家庭のイメージは、自身の幼年時代と、母の愛にみちた家庭にもとづいているのだが、そこには、母の死とともに滅びてしまうことのない、不滅なものがあるかと、彼には感じられていた。そのなにかを、自分の家庭生活で再現し、世界に愛と調和を実現したい、というのが、カフカス時代までの若いトルストイに一貫した志向だった。

ところが、彼の伴侶たるべき女性というのが、まず問題だった。彼は、貴族の令嬢ではなく、チェチェン、ダゲスタン、コサック、農民などの力強い女性に惹かれる傾向があり、こ

¹ 信州白樺第34・35号合併号（レフ・トルストイ特集）1979年11月発行、44-57頁。

の「アマゾネス・コンプレックス」とも言うべき「情念」は、彼の宿願の実現を難しくした。

その最初の文学的具象化が、『コサック』のヒロイン、マリアーナで、この女性のイメージは、トルストイの他のヒロインにも受け継がれていく。だから、ナターシャ、アンナらは、あるていどカフカス、チェチェン起源であることになる。

しかし問題は、こういう「運命の女」にかかわるものだけではなかった。彼が天国さながらに愛着していた、幼年時代の愛と調和の内実とは、そもそもなんであつたらうか？

子供たちへの愛に自分を捧げた母親と、献身的な召使たちに囲まれた環境は、幼いトルストイには、あたかも羊水のなかを漂っているように快適であつたらうが、これには農奴制あつての人工培養空間という面があつたから、ある種の危うさと腐敗の因子を彼に感じさせていたと思われる。それは、社会のお荷物に成り下がりがつあつた地主貴族の虚無感であり、さらにその奥底に広がる人間存在そのものの闇であつた。

地主貴族というのは、自分の「王国」で先祖代々思うがままの生活を享受しながら、「人間は決して幸福になれない」ということが骨身に沁みたまゝの人々である。この絶望を引っくり返すに足るなにかが見出されないかぎりには、ウサーヂバ（屋敷）にじっと腰を据えて、「終わりの日」を待たせようがましである…。トルストイのヤースナヤ・ポリャーナへの、もはや血肉と化した執着はここに起因する。絶望と裏腹の執着なのだ。

そういうヤースナヤの小宇宙に内在する、あるいはその奥にある肯定的なものとは一体なにか？ 果たしてそんなものがあるのか？ それはトルストイにも、後々まで定かならぬものだった——ただひとつ、母性愛をのぞいては。

彼がこうした生の謎をはっきり自覚したのはカフカスの戦地においてで、そのあらゆる惨禍の最中であつて、己の運命のみならず、世界そのものの不条理をも深く認識していった。

世界は不条理なのか？ 後年の『アンナ・カレーニナ』の表現を借りれば、「世界は邪悪な力の嘲笑にすぎないのか？」。この問いを引っさげてトルストイは、クリミア戦争の最大の激戦地に自ら志願して飛び込んだわけだが、そこでの体験は、彼の疑惑を裏書きした。然り、世界は不条理である。

この体験を描いたのが『セヴァストーポリ物語』であり、これは彼の創作の一頂点を画し、名声をもたらしたものの、その実ここで、実生活でも思想でも行き詰まってしまった。

絶望的な結論を得たトルストイは——これがいかにも彼らしいところだが——、今度はその不条理な現実そのものを変えようとする。これがほぼ同時に行われた、農奴解放の試み、教育活動、そして農婦の愛人アクシーニャ・バズイキナとの恋愛だ。

これらは実は、一つの大きな活動をなしており、いずれも、貴族と農民の壁を崩し、農民そしてアクシーニャにできるかぎり近づくことを目的としていた。彼の教育活動は、さらにその上を行く遠大な目標を含んでおり、国家権力から切り離されたトルストイ学校において、いわば「啓蒙されたプラトン・カラターエフ」を続々と生み出し、人類を「改造」しようともくろんでいた。

ところが、学校は、当局の圧力で閉鎖せざるを得なくなり、農奴解放と恋愛のほうも、トルストイの内なる情念のせいで、自壊した。彼には、ほかならぬヤースナヤ・ポリャーナで、先祖累代の地主貴族としての家庭生活を営みたいという、実に根深い「情念」があり、彼はこれを断念することができなかつたのである。その結果、彼の解放案は、通説に反し、悪名高い「農奴解放令」よりもさらに農民に不利なものとなった。祖父以来の「絶望」は克服されなかつたのだ。

トルストイは、ソフィア夫人と結婚してヤースナヤで家庭を築くものの、元愛人への未練を断ち切れない。このことは、夫婦関係に初めから暗い影を投げかけた。

彼がおよそ10年間書きついできた『コサック』を、見果てぬ夢としてまとめ、出版したのは、まさにこの時である。それは現実であることを止め、見果てぬ夢に終わったのだ。

しかし、彼には、あるヒントが残されていた。農民の子供たちとの交流で心に刻まれた、生命の力である。生命というものが、いかなる逆境でもはねかえす不可思議な力を秘めているのなら、自分にも活路はあるはずだ。

そして、トルストイの授業で子供たちが最も熱狂した「祖国戦争」があった。全国民の生命が一つになった、そして今なお一つにし得る1812年の記憶だ。

さらに、これと関連して、彼の頭には、クリミア戦争後によく帰還を許されたデカブリストたちのことがあった。トルストイは、その何人かに会っているが、彼らは、1812年のあの厳冬期、夜は兵士たちと同じ外套にくるまって寝ながら、勇敢に戦いつづけたのである。全国民が一つになったというのは決して空言ではない。それを可能にした生命力とは？ その団結のすがたとはどのようなものか？ ここにこそ、袋小路からの脱出の糸口があるのではないか？——トルストイの問題意識は、この一点に収斂する。

彼は1812年を徹底的に研究し、それが『戦争と平和』に結実することになる。だが、この作品そのものを論じる前に、まずやっておかねばならない作業がある。

第2部 1812年と『戦争と平和』

というのも、これまでの『戦争と平和』論には、大きな欠落があるからだ。この作品の舞台になっているのは、1805年から1819年までで、とくに1812年のナポレオンのロシア遠征、ロシア人の言う「祖国戦争」だ。『戦争と平和』だけ読むと、あまりにも迫真的に描かれているため、それが事実だと思いこみがちだが、じつは、それは多くの点で史実とは似ても似つかないものである。そして、その真実はおぞましいがゆえに隠蔽され、神話化されてきた。

にもかかわらず、作家が真摯に、祖国戦争について可能なかぎりのことを知ろうとし、ついに真実を洞察したことは、『戦争と平和』における資料の使い方からみて、まちがいない。

つまり、祖国戦争の真実を知ることがトルストイにとっては絶対に必要であった。そして、作家は、真実を知ったうえで、ある意図とコンセプトに基づいて、その歴史的事実を確信犯で再構成し、あえていえば歪曲した——こういうことになる。

そのトルストイの意図とは？ それを知ることが『戦争と平和』を理解するには必須である。そして、そのためには、我々もまた祖国戦争の真実を知り、それとこの作品を比較対照するしかない。まさにそれが、これまでの『戦争と平和』論では欠けていたというのである。

I 1812年

祖国戦争の真相

世界史上最大最強の軍隊をまえに、とれる作戦は、大筋で一つしかなかった。退却してできるだけ奥深く敵を誘いこみこむ。そして焦土作戦だ。つまり、各都市を食糧、補給物資もろとも焼き払う。ナポレオンがモスクワまで止まりそうもないこと、彼を止められそうもないことも、初めから分かっており、モスクワ放棄、放火も織り込み済みだった。

問題は、軍隊とその士気を保ちつつ、いかにそれを実行するかだ（軍をやられてしまえば、国家は終わりだから）。まさにその点に、実際に軍を指揮し戦ったクトゥーゾフ、バルクライ・ド・トーリらの功績があるわけだ。ナポレオンやクラウゼヴィッツが言うとおりに、「作戦なんていくらでも考えられる。問題はそれをどう実行するかだ」

本稿で詳述したとおり、露軍将兵が屈辱的な撤退とモスクワ放棄に耐えるには、ボロジノの会戦での大奮戦と、そこから勝ち得た自信が必要であった。また、モスクワ放棄後、ぴったり追尾してくる優勢な仏軍を撒くには、奇想天外な秘策が——モスクワ川の渡河直後の方向転換、60 露里の強行軍が——必要であった。

首都放棄につづく放火については、早くから宮廷、軍上層部が協議し、具体的な準備に入っていた。7月初めにアレクサンドル一世がモスクワにやって来たときは、どう焼くか、だれが焼くか、その細部を決めたのである（セルゲイ・グリンカの『1812年についての回想』）。そのうわさ、憶測は、いろんなルートで流布した（ドミトリー・ヴォルコンスキーの日記）。市民はそのために逃げたのだ。

モスクワ放棄の際、露軍とロストプチン・モスクワ総督、警察らは、全市の焦土化のみならず、ナポレオン爆殺をねらい、クレムリンを含む要所要所に大量の爆薬を残し、放火した（タルレ、ミハイロフスキー＝ダニレフスキーなど）。出火の場所と時間もわかっている。ナポレオンは、命からがらようやく脱出する。

仏軍に消火させないため、あらかじめ消火器材は荷車で搬出し、運びきれない分は、破壊した。そのためもあり、多数の銃砲が放棄されたほか、露軍の2万数千人におよぶ負傷者が置き去りになり、その大半が大火で焼け死んだ。ナポレオンが、「スキタイ人め！」と叫んだのは、こういう、言ってみれば「骨を断たせて肉を切り、勝つ」自殺行為、いわば国家的自爆テロに驚愕したのだ。

モスクワ放棄後カルーガ街道へ移動することもあらかじめ決定されていたが、その具体的な実施方法は、クトゥーゾフに任されていた。「なぜ、カルーガ街道ではなく、リヤザン街道へ行ったのだ？」というアレクサンドル一世の言葉がそれを裏付ける。

なぜカルーガ方面かというと、ペテルブルク方向に退却したのでは、十分な補給が受けられない。それができるのは、南部のトゥーラ、カルーガで、そこには兵器工場と食糧の備蓄がある。まずウラジーミル方面に退いて、南部から補給を受けることも考えられなくはないが、秋にオカ川が増水、氾濫する可能性が大きい。そうすると、南部から切り離されてしまう。というわけで、カルーガ方面しかないのだ。

では、なぜ露軍はただちにカルーガ街道に入らず、リャザン街道を經由したか。フィリからすぐカルーガ街道に入ろうとすると、急傾斜、川、ぬかるみを越えねばならぬにくわえ、仏軍に対し横腹をみせて進まねばならない。リャザン街道は、モスクワ川を渡ってしまえば、比較的安全である。この辺りでモスクワ川はかなりの川幅になり、河岸も急峻だ。

アレクサンドル一世以下の政府が自らの手で、父祖の廟のある首都を、ボロジノ等で命をかけて戦った傷病兵もろとも焼き払う——。こういう国家的カミカゼだから、とうてい真実をそのまま語ることはできなかった。アレクサンドルはもちろん、作戦、焼き討ちを実行した軍、モスクワ総督ロストプチン、セルゲイ・グリーンからも、沈黙するか他に責任転嫁した。

「大きな愛」による神話化

しかし、真相よりもっと驚くのは、国民が「祖国戦争」をどうとらえたかだ。ナポレオンは、悲惨きわまりない焦土作戦がロシアの農民を動揺させ、離反させると期待した。ロシア貴族のなかにも、そういう危惧をいだいた者がいた。ところがそうはならなかった。

デカブリストのマトヴェイ・ムラヴィヨフ＝アポストルは、当時のあらゆる惨禍を振り返りつつ、すべてを承知のうえで、「1812年には大きな愛があった」と感動を込めて語る。国土と国民と戦友を「作戦」のために焼かれ、なおかつ「大きな愛」でむすばれるという精神を、筆者は想像することができない。だがまさにこの点にロシアのおぞましさと凄さがある。

そして、この「大きな愛」が、神話をつむぎだす。「祖国戦争」は、その醜怪さにもかかわらず、本質はこうだった、という確信のうえで、「祖国戦争」はこうであって欲しかったという夢が結晶していく。

トルストイは、「祖国戦争」というロシア国民の夢に、自分の夢を託した。夢と夢とが出会ったのである。

II 『戦争と平和』論

夢と夢の出会い。そして生命の誕生

トルストイは、『戦争と平和』（1864－1869）で、ピエールとナターシャを創造し、自身のコンプレックスを虚構の世界で乗りこえる。ピエールもナターシャも、自分のうちに貴族性と庶民性を融合させている。ピエールは、大貴族の庶子として生まれた。彼の母親は、彼の巨大な体躯、腕力、また雰囲気、態度からして、たぶん農民の女である——おそらく、トルストイのかつての愛人アクシーニャのように強健な。ナターシャはといえば、マリア・アフ

ローシモワが呼んでいるように、「コサック娘」だ。言ってみれば、ナターシャは、貴族の家庭に生まれたコサック娘、マリアーナ（『コサック』のヒロイン）なのだ。

さらに、ナターシャという女性像は、作家のもう一つの、青年時代からずっともちこされてきた課題を解決した。彼女は、二つのことなる女性タイプを併せもっている——トルストイ的美女と理想の母親とを。なぜなら、ナターシャは、妖艶な「魔性の女」のみならず、「強く美しい多産な牝」と「良妻賢母」を具現しているからである。

こうして、ピエールという作家の分身は、美貌の「コサック娘」と理想の母とともに体現するナターシャと結ばれる。彼らの周囲に、彼らの愛のまわりに、世界の調和が実現する。しかも、ナターシャとピエールが活着ているのは、偉大な時代——祖国防衛のために、社会の全階層がひとつにまとまった（と神話化されている）、「大いなる愛」の時代だ。一切の社会的不調和は、この壮大なフィクションの世界、幸福な人間賛歌の夢のなかで消え去る。

こうした例外的な調和の条件のもとで、作者は言うことができる——「生はすべてである。生は神である」。「生あるかぎり幸福もある」。この意味において、『戦争と平和』は、生の賛歌なのである。

『戦争と平和』は、生命についての書ではない。生命そのものである。

『戦争と平和』の生命観は、人物描写によく現れている。この作品の人物は、本多秋五のことばを借りると「脈拍まで感じられる」くらい異常にリアルだが、じつは外見の描写はほとんどない。ピエールやナターシャの目鼻立ちがどうかなどということはほとんど描いてない。では、なにが描いてあるのかというと、その人間に一瞬一瞬に生じる感情、想念、表情、動作など、人間の「断片」のみだ。これは、『幼年時代』から『セヴァストポリ三部作』まで一貫しているが、『戦争と平和』ではさらに、その人特有の、持続する唯一無二のトーン、波動といったものがみられる。たとえば、ピエールの恩人である農民、プラトン・カラターエフの場合、それは「丸い」と表現される。

ピエールがプラトンにはじめて会ったときは、闇のなかにおいてほとんど何も見えなかったにもかかわらず、「なにか丸いもの」をたしかに感じとる。外的な条件（闇）は、ピエールがプラトンの或る本質をとらえることを妨げなかったのだ。

このときだけでなく、いつでもどこでも、ピエールは、プラトンの、文字どおりあらゆるところに、「丸いもの」を感じる——すがた全体、頭、背中、胸、肩、手、微笑、目、顔の小じわ、話ぶり、歯等々に。また、匂い（！）にさえも。

もちろん、プラトンの身体の状態、意識、彼の生活の外的条件は、たえず変化している。にもかかわらず、彼が何をしようとして、何を考えていようと、何を感じていようと、「丸いもの」は不変である、プラトンは、どんな状況でも、どんな生の条件のもとでも、自分のすべての行為に、思考に、感情に、自分の刻印を押してゆく。こうして、「丸いもの」とは、なにか絶対的なものとなる。なぜなら、それは、あらゆる条件の外にあるのだから——。こう

して、プラトンは、「丸いもの」という絶対的な個性をもっていることになる。

じつは、『戦争と平和』のあらゆる登場人物は、それぞれ特有の繊細微妙なトーンを帯びている。それらは、彼らの身体、意識の状態、彼らがおかれた状況に左右されない。この意味で、人間のトーンは、絶対的で、不変なのだ。人間のトーンは、あらゆる物質的なものを超えており、したがって霊的なものである――。

要するに、人間の本質は、この不滅の霊的なものにほかならない。これはおそらく、いわゆる靈魂不滅ということと別物ではない。

『戦争と平和』は、こういう不滅の霊たちの織り成す永遠のドラマなのだ。霊たちは、時間と空間を超えておたがいに結びついており、はかりしれぬ共通の目的に奉仕しつつ、神に近づいていく。それを最も明瞭に表現したのが、ピエールが夢に見た「無数の水滴に覆われた地球儀」であった。

この作品を読むものは、この永遠のドラマが実在することを実感せざるをえない。このことが、読者に希望と力を与えるのである。

第3部『アンナ・カレーナ』

しかし、『戦争と平和』を書き終えると、トルストイは、ふたたび現実について考えないわけにはいかない――。夢は、現実そのものを変えはしない。実際には、ナターシャのような貴婦人＋コサック娘など存在しないのだ。

夢から醒めたトルストイに残されていたのは、「女性的なるもの」、その母性愛への信仰と、尊敬しつつも自分のものとはなしえない、不可解な農民の死生観のみ。それだけが、幼年時代から繰り返し襲われてきた「発作」、すなわち人生の闇への圧倒的な恐怖感から、自分をあてど守ってくれる。

ところが、その「女性的なるもの」、母性愛も、いまやトルストイの世界観の磐石の基盤とはいなくなってきた。一つには、すでに述べたように、ソフィア夫人と結婚したことで、もはやその憧れを現実に満たす可能性がほぼ失われたこと。

もう一つは、概して、女性性、母性愛がトルストイの心中で、『戦争と平和』執筆と前後して、或る問題を鋭く突きつけられるようになったことだ。

それは、母性とエロスの矛盾、相克ということである。なるほど、『戦争と平和』という「夢」の世界をみるかぎり、この問題はそんなに深刻には現れていない。ナターシャは、妖艶な「魔性の女」であるのみならず、「強く美しい多産な牝」と「良妻賢母」でもあるから。

にもかかわらず、いわばご都合主義で創られた虚構である、そのナターシャにおいてさえ、エロスと恋愛と母性がつねにうまく調和しているとはかぎらない。彼女のアナトーリ・クラウギンへの恋をみよ！

トルストイがこの問題、エロスと母性の矛盾を鋭く感じるようになったのは、妹マリアと義妹タチアーナ・ベルスの「姦淫」と悲劇を目の当たりにしてからだろう。マリアの夫、ヴ

アレリアンはトルストイらを深く怨んで、おそらくは自殺を遂げ、タチアーナは自殺をはかった。この自殺未遂の直接の「引き金」をひいたのも、作家自身である。

こうしてトルストイは、新たな問題に直面することになったのである。すなわち、「女性的なるもの」のなかには、エロスも母性もふくまれているわけだが、もしも、その女性性がその本質において矛盾をはらんだものであるならば、はたしてそれは、世界の調和のゆるぎない基盤たりうるか？ 換言すれば、女性性のなかで、母性とエロスを調和させ統合することができるか？ できなければ、トルストイの世界像は根底から覆ることになる。

これはつまり、彼が幼年時代から引きずってきた「闇」に、もはや遮蔽物なしで直面せねばならないことを意味する。『幼年時代』の明暗の明の部分はずでに滅びつつあり、それが抑えていた暗の部分が噴き出したのが、あの「アルザマスの一夜」の恐怖なのだ。

この問題を解決するために、トルストイは、『アンナ・カレーニナ』（1873—1877）を書いた。しかし、問題は、またしても、最もラディカルな、思いもかけぬ方法で解決されたのである。作家は、女主人公アンナにおいて、自分の内面の「理想の女性」を具象化し、それを葬り去り、そうすることによって問題自体を消去しようとするのだ。

『アンナ・カレーニナ』で「女性的なるもの」を殺し、葬る

アンナ・カレーニナ——この若い母親こそは、トルストイにとって最高の女性像だ。彼女にはすべてがあるように見える。彼好みの美貌、魅力、愛、エロス、高い精神性と知性、驚くほど多方面にわたる才能——そして、ゆたかな母性。

作者は、そうしたアンナを、困難な生の渦のなかに放りこむ。彼は、ヒロインに最上流階級で特権的生活を享受させたい恋に陥らせることで、作品のテーマと直面させるのだ。テーマとは、すなわち、生活が、不自然で利己的なものであるならば、愛もまた、不自然で利己的なものになる。

こういう生の条件のもとで、アンナは、愛とエロスと母性をうまく調和させられるであろうか？ 虚構の世界では、ナターシャ・ロストワは、それをなしえたが——。こうして、アンナに、**愛とエロスと母性とを統合する課題**が与えられる。

試練を課されたアンナは、自分のありあまる美点をよりどころにして、それにうち勝たなければならぬ。しかし、トルストイは、最初からヒロインが試練に敗れることを予期していた。彼は、作品執筆のそもそもの始めから一貫して、アンナの破局を予定していたのである。「アンナは家を出て、身を投げる」²

アンナは、抗しがたい力で、悲劇に向かって引きずられていく。彼女の母性愛も、高度な知性、精神性も、自己実現の欲求と仕事も（病院建設、農村の学校での授業、猛烈な読書、子供のための小説の執筆）、さらには、明晰な自己認識さえも（彼女は、自分の悲劇の原因を完全に自覚している）、すべて役に立たない。諸悪の根源は——彼女の女性性そのもの、なか

² № 1 (рук. № 1). — 20, 5.

んずくエロスだ。

「もしも、わたしが、あの人の愛撫だけを熱烈に愛する愛人以外のなにかならしたら。
でも、だめだわ」(7章 30 節)

しかし、エロスは、「女性的なるもの」と不可分である。ということは、女性性は致命的な矛盾を内包していることになる。だから、それはもはや、生のよりどころたりえず、世界の調和の基礎になりえない——。このことを、いまやトルストイは確信した。

かつて、アクシーニャとの苦しい恋のさなかにも、「女性的なるもの」の否定が、作家の脳裏を予感のようによぎったことがあった。

「私は、いく晩も眠れぬおそろしい夜をすごしながら、私を苦しめるこの愛をこなごなに砕き、壊そうとした。でも私は、それをすっかり破壊はしなかった。ただ私を苦しめるものだけを破壊し、また心の落ち着きをとりもどした。そして、いまでもやはりおまえのことを愛している。でも、べつの愛で愛しているのだ」(『家庭の幸福』2編 9 章)

こうしてトルストイは、女主人公、アンナを殺し、自分の内面の女性像を葬り、「女性性」を解体して、ニュートラルな裸のイデー、「善」と「愛」だけを残す。彼はいまや、ニュートラルな「善」と「愛」によって、自分の目的を、現実において達しようとする。彼は、万人に対して、善と愛によって結合せよと呼びかけるのだ。これこそが、トルストイの「転回」の本質であり、ここから、彼の創作活動の後期がはじまる。

「ひげもじゃの小さな男」と「赤い袋」

こうしてアンナは、作家の予想どおり（あるいは希望どおり）、生の不条理との戦いに敗れたわけだが、では、その不条理は、いったい具体的にどのように捉えられているのか。

彼の世界認識が、この作品ほどの深さと徹底に達したことはかつてない。その認識の果てに、彼は、アンナ＝女性性をこの世に調和したかたちで入れる余地はないことを確認し、それを葬り去った。換言すれば、アンナは、全力でぎりぎりまで不条理な世界と戦い、破滅したが、その原因は、たんに彼女が女だからであった！

そういう世界とはなんなのか。それは、作者の目に、アンナの目にどのように映じ、表現されているか。アンナの悲劇を説明しうるような究極の真理があるのか。つまり、彼女の死にはなにか必然的なものがあるか。あるいは、それは、結局のところ、トルストイの「女嫌い」のためか。つまり、女への愛憎と呪詛で心身を病んだトルストイが、なにがなんでも、自分の「アニマ」を殺したかったということか。畢竟、『アンナ・カレーニナ』における生の不条理とはなにか？

アンナがはっきり自覚しているように、彼女が破滅したのは、要するに、恋人のヴロンスキーなしでは生きられないからだ。それだけである。彼女にとっては、彼のほんとうの愛情さえあれば、あとはどうでもいいのだが、この男のほうはというと、社交界なしでは生きられない根なし草である。アンナとの不倫の恋は、まさにその社交界への復帰を不可能にするから、彼の恋がさめるのは時間の問題なのだ。しかも、こういう根なし草は、かつてプーシキンが『エヴゲーニー・オネーギン』で喝破したように、人をほんとうに理解し愛することはできない。

じっさい彼は、アンナが苦しんでいるのは、「立場のあいまいさのためだ」と、最後の最後まで信じ込んでいる。つまり、カレーニンと離婚して社交界に戻れば問題はなくなる、という一方的な思い込みで、自分の悩みを相手に投影しているにすぎない。だが、アンナが苦しんでいるのはまさに、「ヴロンスキーは、彼女の苦しみの奥底まで理解することはできない」からであり、いつかはその恋がさめるという絶えざる恐怖のためなのである。この一見複雑に見える悲恋の本質は、じつは以上で尽きているのだ。

要するに、破局に終わるのが最初からみえている恋のために、アンナは捨てられるものも捨てられないものもぜんぶ捨てて、自分を貫いたと言える。だからこそ、彼女は見事にヒロインたりうるのだが、その最高の「自己実現」の結果、破滅させられるのでは、読者としても釈然としないではないか？

そんな世界が（または作者が）善なるものといえようか。じつは悪ではないか？ レーヴインが疑っているように、世界とは「邪悪な力の嘲笑」にすぎぬのではないか？ 「何者かが、自分をこの世につくりだし、意地悪くまた愚かしく弄んでいる」（『懺悔』4章）…

と、疑問をもって、もういちどこの作品をよくよくみわたしてみると、じつに奇妙な「登場人物」がいることに気がつくのである。しかも、この「人物」がアンナの破滅に関係していることは確実にみえる。これが、もしや、なぞを解く突破口になりはしないだろうか――

それは、何者とも知れぬ「小さなひげもじゃの男」と、アンナの「赤い袋」（バッグ）だ。「赤い袋」が描かれると、かならず、この奇妙な男が現れる。そして、アンナの身にかならず重大な事件が起こるのだ――ヴロンスキーとの出会い、彼の子の出産、そして自殺――。しかもこの男、現実にはアンナにつきまとうだけでなく、ふたりの夢のなかにも出現する。おまけに夢の内容が同じだ。夢で男は、「鉄を鍛えねばならぬ。鉄を砕き、つぶさねばならぬ」と意味不明なことをフランス語でつぶやく。アンナはこの男におびえ、凶兆だと思っている。

このほとんど超自然的な、まるで悪霊のような存在が、アンナをすこしずつ死に向かって引きずっていくようにみえる。アンナ自身がそのように感じ、男を恐れている。

それで、この男について深く考えていくと、まさにそれが上の疑問に答える巨大な象徴であり、同時に生きた存在であることがわかるのだ。

藤沼貴氏は、「男」が神話的表象の「鍛冶屋」と関係があるという仮説を提出した。本稿では、他の論者たちの説とあわせ、この説を検証した。以下、結論のみをかたんに記す。

「神話的鍛冶屋」

神話・民話における鍛冶屋は、洋の東西を問わず、同じような特徴をもつ——預言的能力がある、ひげもじゃあるいは毛むくじゃら、何らかの身体障害がある、魔力をもつ、男女の仲に介入する、など。代表例は、ギリシャ神話の鍛冶の神、ひげもじゃで足なえのヘーパイストスとか、北欧神話の地底に住むこびとの鍛冶屋たちだ。

トルストイは、論文『こうでなければならぬのか』の第1稿で、鉄鉱石を採掘する労働者の様子を、「屈んで...何かごそごそやっている」と表現している。この表現は、「男」の描写にそっくりそのまま使われていた。このことから、男と製鉄業とのつながりが裏づけられよう。

ではなぜ『アンナ・カレーニナ』に鍛冶屋がでてこなければならぬのか。いく人かのロシア詩人は、19世紀を新たな「鉄の時代」とみなした。「時代は鉄の道を歩みはじめる」（バラティンスキー『最後の詩人』）。「十九世紀は鉄の時代、真に残酷な時代！」（ブローク『復讐』）。「鉄の時代」とは、ギリシャ神話の残酷で労働と悲しみのやむことのない時代だ。彼らは、これに、自分たちの時代をなぞらえたのである。

ギリシャ神話の「鉄の時代」には、歴史上の「鉄器時代」が反映している。鉄器時代になって人類史上初めて大量生産と大量殺戮が可能になり、人類の生活形態と意識が一変したからだ。この一大変革の否定的な側面が、神話に結晶したのである。

『アンナ・カレーニナ』の舞台、1870年代のロシアでは、ときあたかも第一次産業革命が始まり、「鉄の時代」が本格化しようとしていた。そして、鉄道はその文字どおりの牽引車となった。残酷で、神を喪失し、欲望をひたすら肥大させ、どこへゆきつくか分からぬ、新たな「鉄の時代」——その象徴、「ひげもじゃの男」が、執ようにアンナにつきまとう。そればかりか彼女は、鉄道の車輪に——「鉄」に——押しつぶされて死ぬ。このことは、アンナの愛の悲劇が、個人的なものであるばかりでなく、新「鉄の時代」全体の悲劇に根をもつことを暗示している。そして、その根は、遠い「鉄器時代」に起こった人類の生活の激変と本質的に同じ面をもつ、とトルストイは考えるのだ。

男＝運命の告知者

翻ってみれば、アンナの悲劇は、あるていどトルストイ自身のものでもあった。新たな「鉄の時代」＝「ひげもじゃの男」が、彼があんなに執着していた、あの昔ながらの農村を、ヤースナヤ・ポリャーナの小宇宙を破壊していく...

しかし——ここが肝心なところだが——、彼の土地所有も、ロシアの農奴制も、もとはといえば、やはり「鉄」の産物ではなかったか。およそあらゆる文明に、いや人間そのものに内在する「鉄的ななにか」が、今日の問題をもたらしたのだから。そして、彼の歪んだエロスもまた、結局はそこに発するのではないか。

なぜなら、鉄自体はニュートラルなものにすぎず、問題の根は、それを利用する人間の権力的思考と、それと不可分の性に行き着くからだ。「ひげもじゃの男」は、だから、あらゆる

人間の内部にひそむもの、人類を不可逆的に破滅に向って駆り立てる何者か、ということになる。その何者かは、アンナだけでなく、トルストイ自身をもつねに脅かしてきた――。

彼はもしかすると、こういう「霊」を、アンナのように、夢かなにかで見たことがあったのかもしれない。そして、アンナ同様、「よくないしるし」として、暗い運命の告知者として、感じていたかもしれぬ（ちなみに、「運命の告知者」であることもまた、神話的鍛冶屋のおもな特徴のひとつだ）。

ここで一つ重要な問題が生じる。アンナの「運命」は、あらかじめ宿命的に決定されてしまっているのか否か？

然り、決定されている。前に述べたが、アンナ自身がはっきり自覚しているように、彼女が破滅したのは、「ヴロンスキーの愛撫」なしでは生きられないからだ。それだけである。彼女の行動の余地をくわしく探ってみても、それはゼロに近く、しかもそのうえ作者は、アンナを破滅させるべく次々に陥穽をしかける。

したがって、当然のことながら、アンナの必然的、暴力的宿命の「黒子」である男の不吉な予言はほぼ 100%当たっているのだが、ひとつだけ、外れたケースがある。

アンナの夢が彼女にはっきり死を予告したことを思いだそう――「お産ですよ、お産で亡くなられますよ、奥さま」（4章3節）。にもかかわらず、彼女は死ななかつた。なぜか？ヴロンスキーの女兒を出産して危篤に陥ったアンナは、カレーニンに罪を告白し許しを請う。

カレーニンをも動かした懺悔のあと、アンナはまさに奇跡的に快方に向かう。この懺悔は、彼女の運命を明るい方向に転じ、生命を救ったのである。そうとしか受けとれない。

この場面をみるかぎり、アンナの運命は、彼女の行動によって、彼女の選択によって、変わりうる。まさしく、「だれもが、おのれの運命を鍛える鍛冶屋」なのだ（ロシアの慣用句）。

この世界は、けっして「神なき世界」ではない。「男」のでてくる夢がアンナに死を予告したにもかかわらず、彼女の懺悔は死を追いやった。しかし問題は、この神は――すくなくともこの世においては――あまりにも無力であることなのだ。

アンナが死にかかり、当人も死を覚悟し、もはや肉体もエロスも意味をもたなくなったときは、彼女は肉体から解放され、「彼女の霊があらわになる」（7章13節）。彼女の恋は、エロスから解放され、神的な愛となった。それは、カレーニンの「霊」にもはたらきかける。

ところが...アンナの肉体が回復するにつれて、エロスも、カレーニンへのどうしようもない嫌悪感も、すっかり元通りになってしまう。そして、ここが肝心なのだが、この過程は、まさにそれ以外ではありえない、暴力的、強制的なものとして描かれていて、アンナには選択の余地はないようなのだ。神よりも強い暴力が、「粗野な、より強力な力」（4章19節）が、「なにかの戦いの邪悪な霊」（7章12節）が、つねに働き、アンナの意志を封じてしまう。

端的に言えば、この世界では、「神」よりも「邪悪な霊」のほうが強いのである。「邪悪な霊」は、アンナのみならずほかの登場人物たちをも、いやそれどころか、「鉄の時代」の全体

を、不可逆的に奈落に吸い込んでいく。

女が女であるがゆえに滅びなければならない、人間が人間であるがゆえに破滅しなければならない、そういう世界だ。なるほど、この世界には、トルストイの真の洞察と呪詛が混在している。しかし、その呪詛もまた、自身の不条理な宿命の洞察にもとづいているのであった。その根源にあって「鉄」を鍛えているもの、それがあの「男」だ。

結論

前期トルストイの作品と思想はわれわれになにを語るか

こうして、トルストイは、幼年時代の光と闇をしゃぶりつくした——真に普遍的なものを掬い出すために。彼が、そこからなにを生み出し、なにを棄て去ったかを確認しておこう。それが、彼のわれわれに発するメッセージにほかならない。

トルストイは、『戦争と平和』で、幼年時代の愛と調和の再現という自身の夢を、あらゆるロシア人の意識に漠然と漂っていた 1812 年神話を触媒として、世界大、宇宙大にまで拡大した。その際、彼がいかに深く祖国戦争を研究したかは、すでに見たとおりだ。

それにくわえてトルストイは、その夢を完全に生きるために、いってみれば**夢の再現実化**を徹底的に行っている。さまざまな自由と必然が交錯する場である現実世界を、「作者の無限の逸脱」という天才的洞察と着想により再現し、そこに夢を移したのである。

「作者の無限の逸脱」とはすなわち、一つの視点から別の視点に絶えず「逸脱」ということであり、人間と人間がおかれた状況とを、無限に多様な視点から描き出していく。このトルストイのアプローチは空前のもので、人間の認識というものの秘密と同時に、現実世界の本質的な多層性を開示する。

しかも、その夢に生きる人々もまた、文学史上空前の様相を呈している。彼らは、それぞれ特有のトーン、波動を帯びた、感情、想念、動作、行動などの「水滴」（霊的エネルギー）の寄り集まったものだ。独立、完結した個体としての人間ではない。

だから、明確な単位としての個人が、それぞれの属性にしたがって関係し合うという古典物理学的、原子論的パラダイムは、『戦争と平和』の世界にはない。この作品のパラダイムはそれとは根本的に異なるのだ。この点に注意されたい³。

それは「**霊的量子**」ともいべきもので、トルストイの超リアルな人間把握、世界把握と宗教的憧憬がむすびついて前代未聞の人間像、世界像を打ち立てたのである。『戦争と平和』という夢は、神秘性と同時に現実性をも最高度に兼ね備えているのだ。ナターシャという、貴族性と野性のみごとに併せもつ女性像には、こういう夢の実現の歓びが結晶している。⁴

³トルストイが『戦争と平和』のなかで、宇宙空間を埋め尽くすエーテルを比喩的に用いているのは、このためだ。もし当時すでに量子力学があったら、彼は当然、これも使ったろう。なお、後年彼は、仏教、道教などの東洋思想に深い関心を示すが、その理由の一つはこうした独自の世界感覚にある。

⁴本稿では、ボリス・エイヘンバウムとヴィクトル・シクロフスキーのトルストイ論を、とくに『戦争と平和』との関連で、突っ込んで検証、批判している。ここでのような批判的視座も、これまで提出されなかった。

ところが、これほどの夢でさえ、自分の生を支えるには足りないと思極めるや否や、作家はそれを棄て去り、幼年時代の闇に下降していく。『アンナ・カレーニナ』で彼は、最後の拠り所であった母性と女性性を体現した同名のヒロインを創造し、現実世界の暗い渦に投ずる。

この実験によりトルストイは、世界に開いたブラックホールの彼方から噴き出してくる「邪悪な力」がアンナをはじめあらゆる人々を翻弄するさまを見極めた。そして、その力が「象徴の森」を生む心理的メカニズムを見抜いたが、それだけではない。

彼は、それを逆手にとり、その心理的メカニズムと戦慄を完璧に再現するために、独自のシンボリズムとサブリミナルの手法を、ロシア・シンボリズムにはるかに先駆けて編み出した。だから、この作品は、象徴主義という文学流派が死んでも、今日性を失うことがない。現代という寄り添えない時代のみならず、どの時代にあっても、ブラックホールはいたるところに開いており、それに翻弄されつづけるのが人間なのだから。

そしてトルストイは、自らの内なる女性像を殺害、解体し、「普遍的な愛」を取り出すという、心理的にはきわめて危険な離れ業を強行した——その普遍的愛を、ブラックホールとしての世界における新たな調和の原理とするために。

この精神的自殺と再生が徹底的に行われ、トルストイの精神を一変させたことは、アンナという女性像の凄愴な美をみれば明らかである。そこには、彼の全重量がかかっていたのだ。

トルストイは、それほどまでに、『幼年時代』に胚胎していた明と暗を食い尽くした。そして、その結果、そこになにも見つからないのが分かったと、半生の憧れに別れを告げたのである。そして、これが後年の家出につながっていく…。

ちなみに、アンナ・カレーニナが、家出したあと、息子セリョージャに会いに行く名高い場面がある（5章 29-30節）。ツルゲーネフが「こうまで書けるものか！」と賛嘆した場面だ。ここでアンナは、息子とかつての我が家に別れを告げたのだが（内心、二度と会えないことを悟っているようだ）、たぶん、それだけではない。トルストイ自身が、家庭と母性と決別しているのではないだろうか。

思えば、作家の出発点、『幼年時代』も、母との別れを描いた。だがそれは、あの世界をふたたび見出すための出発点でもあった。ここでは、その長い探求に、憧れに、永遠に終止符を打ったのである…。

トルストイの隠れた予言

おそらく世界は今、歴史上幾度もなかったような危機に滑り落ちつつある。筆者は、その震源地の一つであるロシアに身を置きつつ、日々思う——やはり、トルストイは正しかった。彼が自殺にも等しい自己放棄で自分と世界を救い出そうとしたことには、それだけの根拠があったのだ、と。

いかなる科学技術の進歩も、無尽蔵の富も（ミダス王さながらの米連邦準備制度の量的緩和も）、社会制度やインフラの整備も、救いにはならぬどころか、根本的モラルの崩壊のもとでは、人間が滅ぼし合うための武器にしかならない。これを彼がはっきり見抜いていたことには、一点の疑いの

余地もない。

その証拠を一つ挙げると、『イワンの馬鹿』（1885年）で悪魔は、イワンの兄、太鼓腹のタラスの国に乗り込み、金貨を際限なく供給し（しかもインフレをうまく抑え）、土地をはじめあらゆる資産、商品を買占めあるいは価格を操作し、ついには王妃の身柄を買い取ろうとする（という噂が流れる）。国家の丸ごとの買収である。この作品が書かれて130年近く経ってようやく、巨大な国際金融機関やヘッジファンドなどが、「金融爆弾」で一国家の運命をどうにでもできる状況になりつつあるが、これがそっくりそのまま、この作品では先取りされており、トルストイの洞察力には驚くほかない。

またこの作品には、高性能機関銃、空中から爆弾投下する飛行機、すべてを焼き尽くす火炎放射器など、はるかに時代に先行する兵器、技術が出てくる。⁵だから、『イワン』の作品世界は、イテク製品と金があふれた、現代の先進国に置き換えていい。

だが、それだけではない。資本主義というものは、分業システムと市場が地球大にまで拡大し、消費が限界に達して、もう利益が上がらなくなれば、必然的に終焉するのだが（これが今、世界で進行していることだ）、まさにそのことが三兄弟の国に示されている。現代人の多くはまだ、トルストイのこの恐るべき予言の意味に気がついていない…。

悪魔が黄金漬けにしたタラス国は、現代世界そのものだ。そのうち消費と市場拡大が止れば、技術と生産体制は維持できなくなり、人口も減っていくだろう——非常な痛みをともないつつ。結局のところ、イワン国のように、手仕事で生き延びるしかなくなるのだ。悪魔の金で膨らむだけ膨らんだ世界は、歴史を後戻りし、自分の手でじゃがいもを植える羽目に陥るというトルストイの皮肉である。イワン国は、19世紀ロシアの農村ではない。近未来の世界だ。

ここまで見抜いていたトルストイが、前期のあれほどの創造を棄て去り、一縷の可能性に賭けたからには、後期の思想にはやはり重大な意義が秘められており、現代人にメッセージを発しつつけているはずだ。筆者はそれを確信する。

彼にはいつも、「悪魔のプログラム」がまざまざと見えていた——おそらく他のだれよりも。だが、「緑の杖」を見出すことも、彼は生涯断念しなかった。

トルストイの伝記的事実にかかわる発見

最後に、作家の伝記的事実にかかわる発見、成果のうち主なものを簡単に整理しておく。

- ・彼の生地ヤースナヤ・ポリャーナの建設者である母方の祖父、ニコライ・ヴォルコンスキーの生涯について可能かかぎり再現した。
- ・大学退学の原因、それと前後するペトラシェフスキー事件とのかかわりでは、資料を精査し、独自の結論にいたった。
- ・軍記物の『森林伐採』において、『戦争と平和』の理想的農民プラトン・カラターエフに直接つながる人物像が、実在の兵士ジダーノフにおいて誕生する点を指摘した。
- ・ルソーとの思想的対決の真相に可能かかぎり迫った。

⁵ 法橋和彦著『古典として読む『イワンの馬鹿』』（未知谷、2012年9月）、115-116頁。

- ・コサックやチェチェンなどカフカスをルーツとする女性像の系譜が確かめられた。
- ・トルストイによる農奴解放の試みの実情を明らかにし、政府の解放令より進歩的という通説を覆した。また、これまで知られていなかった彼の「農業メモ」を入手し、既存の資料とつぎ合わせた結果、彼と農民との関係における分水嶺ともいえる或る日のドラマを再現した。それは後に、『アンナ・カレーニナ』におけるレーヴィンのターニング・ポイントとして、描かれることになる。
- ・故藤沼貴氏が生前発表されなかった、トルストイの妹婿ヴァレリアンの死因にかんする説を紹介した。作家自身が心ならずも、義弟を自殺に追い込んだのである。これは、後年の「転回」を考えるうえできわめて重要だ。
- ・トルストイと画家イヴァン・クラムスコイとの交流を追跡しつつ、『見知らぬひと』（邦題「忘れえぬひと」、1883年）のモデルがアンナ・カレーニナであることを論証した。